ドイツ生まれの橋

16 古河橋

ふるかわばし

古河橋は、栃木県上都賀郡足尾町の町域に架設され、一気に松木川の渓流を渡り切る、ピン結合様式で支間48ｍのボーストリング・ワーレントラスである。松木川は古河橋の数キロ下流で神子内川と合流し、渡良瀬川（わたらせがわ）と名称を変えて関東平野へと流れ下っていく。渡良瀬川は関東平野のほぼ中央で利根川に合流するけれど、その間にいくつもの歴史的な名橋が河流に姿を映している。古河橋はそれらの中で、最上流に位置づいてきた。

古河橋の名称は、足尾銅山近代化の立役者、古河市兵衛（1832～1903年）に由来する。天文19年（1550）の発見と伝えられる足尾銅山は、多量の銅を産出し、幕藩体制を支える役割を果たしたが、明治初年には衰退の兆しを見せていた。こうした状況の中で、銅山経営を手掛けた古河市兵衛は、ジーメンス社（ドイツ）派遣の外人技師から助言を受け、水力発電所を基幹とする坑内外作業の電化、機械化の推進によって、リストラを達成したのである。松木川に注ぐ出川の谷底に坑口を設けた本山坑（有木坑）に至る交通路上に古河橋は位置し、明治23年（1890）の架設と称される。

放物線を描く上弦材には、メーカーとしてのハーコート社の銘板と輸入商社の高田商会を表す銘板がそれぞれ付いている。ドイツからの輸入は、ジーメンス社からの技術導入とのかかわりかと思われる。

各部材はボルト・ナットとピンで結合し、現場でのリベット打ち作業を一切省略する手法が用いられている。上弦材はH形断面で、めずらしい構造である。

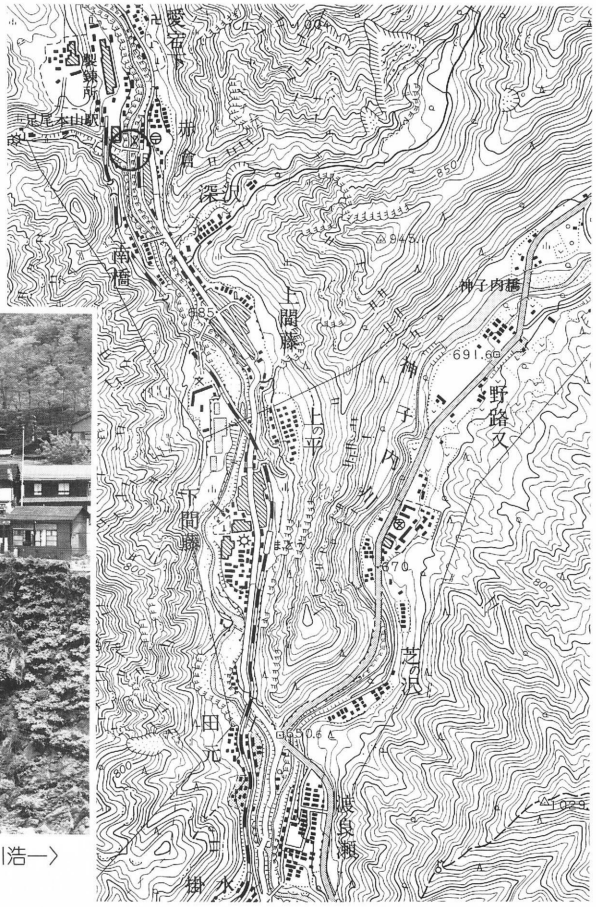
架設以来100年をこえる古河橋は、平成５年、下流側に架設された箱桁橋に車道橋の役割をゆずり、木床版、木高欄を整備のうえ、町指定文化財としての体裁をととのえ、歩道橋として再生した。わたらせ渓谷鐵道通洞駅に近い町民センター内にある足尾銅山記念室には、銅山操業当時の古河橋の歴史的な写真が展示されているが、それによると、鉱山用電気軌道の線路を敷設する併用橋としての供用時期があった事実が明らかになる。歩道橋への転用直前の古河橋では老朽化が著しく、それでも大型ダンプトラックが通過するため、「一橋一台」「最徐行」の標識が掲出されていた。

足尾町教育委員会による歴史的意義を示す説明板が設置されていたけれども、「…日本最初の道路用鉄橋として記念すべきものである。…」というのは、お国自慢のゆきすぎで、贔屓（ひいき）の引き倒しの類であった。〔NK〕

竣工年月：明治23年（1890）年12月28日
所在地：栃木県足尾町
河川名：松木川
橋長・幅員：48.5ｍ×4.5ｍ
径間数・支間長：１×48.02ｍ
形　式：ボーストリング・ワーレントラス（ピン結合）

歩道橋となった古河橋　〈1994年2月11日，撮影・小西純一〉

車両が通行していた頃の古河橋　〈1988年5月，撮影・中川浩一〉



（1:25,000　足尾）